

非精神病性ひきこもりの理想自己志向性の特徴 とカウンセリングにおける変化

高橋 紀子 九州大学大学院人間環境学府

Characteristic of withdrawal client's self idealization evaluation and the change in counseling

Noriko Takahashi (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this paper is to examine the characteristic of withdrawal client's self idealization evaluation and change of it in counseling. Object is 4 cases had published in memoir and bulletin. What are discussed is as follows: (1) They are in the situation which has lost Autonomy and cannot form ideal self based on self: (2) The characteristic needed for social adaptation carried out value lowering, and it was suggested that there is a tendency avoided from society. And, while carrying out self-expression by counseling, (1) they form the ideal self based on self. (2) They choose actively the place of the society which suited itself, and come to aim at the characteristic for being adapted as ideal self.

Keywords: withdrawal, self idealization evaluation, counseling

1 問題と目的

「こうありたい」自分への囚われは、「でも、そうではない」現実の自分を攻撃し、戒め、悩ませる。「こうありたい」自分、即ち理想自己と現実自己の視点からクライアントの傾向やカウンセリングの効果について始めて言及したのはロジャーズ (Rogers, 1954) である。ロジャーズは、クライアントにとっての理想自己とは自己に不満であることを示すものであり、それがカウンセリングの動機付けともなるとした。また、成功したカウンセリングにおいて、クライアントの理想自己と現実自己の分裂は減少することを実証的に示した。このことから、クライアントにとってのカウンセリングプロセスとは、理想自己の攻撃から解放へのプロセスとみる事ができるのではないだろうか。

ここで忘れてはならないのは「理想自己は自己形成意欲などの肯定的側面も持つ (水間, 1998)」点である。つまりクライアントの苦悩は理想自己を持つが故ではなく、それに囚われるクライアントの理想自己の位置づけ方に起源があると推測される。言い換えると、カウンセリングの体験を通して理想自己は、「囚われる」ものから「あっても囚われずにいられる」ものへと、個人にとってのその位置づけ、意味を変化させるものと考えられる。

筆者は個人にとっての理想自己の位置づけを測るひとつの視点として理想自己の志向性に注目し検討した (高橋, 2002)。理想自己の志向性とは、どうなることを志向して、それを理想自己とするのかといった理想自己の方向性や位置づけのことである。自己に関するこれまで

の研究や理論をもとに、理想自己志向性には、①自分の特性をより発揮したいとするもの (自己基盤志向)、②自分にはない他者の優れた特性を取り入れたいとするもの (理想的他者志向)、③社会に適応するために、周囲に求められるであろう特性を身につけたいとするもの (社会的価値志向) の3つがあると想定した。そして大学生を対象とした研究によって、これらの理想自己志向性は個人によりそのウェイトの比重が異なること、そしてそのウェイトによって大学生活のQOIの高さも異なることが明らかになった。

この理想自己志向性の視点からクライアントのカウンセリングにおける変化をみることで、クライアントの理想自己の位置づけがカウンセリングによってどのように変化するのかより詳細に把握することができるのではないだろうか。そしてそれは、カウンセリングの体験によってクライアントにどのような内的変化が生じているのかを理解する一助になると思われる。

なお、一定の傾向を検討する上でどの対象を選定するかは重要な問題であるが、本研究ではひきこもりを訴える青年期のクライアントを対象にすることとする。

ひきこもりとは「人間関係を取結ぶことに悩み、学校、社会、知人、そして親からさえも逃避し、人間関係を拒絶すること (富田, 1996)」と定義され、それ自体は病気ではなく状態である。また近藤 (1997) も指摘するように、ひきこもり状態にあるクライアントの中には神経症水準から自我同一性の障害や現実検討力に問題のある境界例水準まで多岐にわたっており、その診断は幅が広く、病理的背景も様々である。

しかしそうした中で、これまで統合失調症の症例で取り上げられることが中心であったひきこもりの問題が、近年、青年期の非精神病性のケースの中に増加している傾向があるのも確かである。青年期が自己の問題と適応の関連が深い時期であり（溝上，2001），ひきこもり経験の心的変化には「理想の断念と適応のテーマが語られる」とする桜井（2002）の指摘もあることから、理想自己はひきこもりの青年のカウンセリングでもひとつの主要な軸として扱われる可能性が高いだろう。そして、非精神病性ひきこもりのカウンセリングプロセスでの理想自己の質的变化は、クライアントにとってより重要な要素であることが考えられ、それだけにより明確にその傾向をみるのではないだろうか。

よって本研究の目的は、非精神病性ひきこもりの症状を持つ青年期のクライアントを対象にし、彼等の理想自己志向性の特徴と、カウンセリングにおける変化を検討そのすることである。

II 方 法

対象：学会誌もしくは紀要に掲載された非精神病性ひきこもりを呈する4事例を対象とする。

これらの事例は、クライアントの状態とカウンセリングの形態に一定の基準を設け選定した。クライアントの状態基準には、斉藤（1998）の、「20代後半までに問題化し、6カ月以上自宅にひきこもって社会参加をしない状態」があり、「ほかの精神障害がその第1の原因としては考えにくいものであること」とする基準を採用し、それに該当するものを選定した。また、それぞれの事例の共通性をより客観的に検討する為に、カウンセリングの形態が本人面接であること、そして言語による関わりを主とするものであることを条件とした。

分析方法：

1. 事例の記述

まず全事例の記述をある程度の一貫性と客観性を持たせるために、記述の中から①日常での生活状況・対人関係②カウンセリングでの様子と語られる内容を中心に整理した。

2. 期分け

上記①、②の変化を基準に各事例を3期（導入期、展開期、終結期）に分けた。

事例Cは継続中であり、カウンセリング場面では終結について話されていない。しかし、終盤の回で自立のテーマがいくつか語られていることから、終結期に入っているとみなすのが適切と考えた。

また事例Dは他の相談機関から引き継ぎされたケースである。クライアントの行動範囲の広さからすると他事

例の展開期にも該当するが、新しいカウンセラーに出会った回数にみせたクライアントの戸惑いやカウンセリングでの態度を考慮し、初回の数回は導入期と位置づけるのが適切と判断した。

3. 理想自己志向性の検討

クライアントの発言と行動を中心に、それが理想自己志向性（自己基盤志向、社会的価値志向、理想的他者志向）の中のどれを表すものかを面接の流れに留意しながら分類した。そして、導入期、展開期、終結期それぞれの特徴を検討した。

III 事 例

事例の概要を①日常での生活状況・対人関係（以下、①日常と記す）と、②カウンセリングでの様子と語られる内容（以下、②カウンセリングと記す）を軸に示す。「」はクライアントの発言を示す。

1. 事例A（山本，2001）

22歳，男性。3人兄弟の長男であり，父親は躁うつ傾向により通院歴がある。クライアントは小・中学校時代から不登校があり，高校へも一旦入学するもすぐに行かなくなる。知人の紹介でアルバイトをはじめたが，仕事にあき辞めてしまいその後何年か家に閉じこもりがちになる。「朝起きるのもやっとで，ようやく居間に顔を出せるような状態」。カウンセリングには父親の勧めで来所。全16セッション。終結事例。

(1) 導入期（#1～#3）

①日常：友人にアルバイトの紹介を依頼するが失敗。

②カウンセリング：自分の努力を認めない父親への憤りが語られる。そして親の考え（外で働いてなんぼ）を自分に課す。「どんなことが合ってるかわからないが，やってみないとわからない。」と現段階のクライアントからすると現実的ではない目標への実現にこだわる。

(2) 展開期（#4～#6）

①日常：該当する記述なし

②カウンセリング：アルバイトが決まらない中，「自分は両親に養われている。自立したい」と焦る。今の自分を評価させると10点中1点とする。「人もそう（1点だと）見てると思う」。カウンセラーとのやりとりの中で，クライアントは以前よりいくつかできていくことに気づく。また，「人付き合いが悪くなまけた。すぐに逃げ出して休んだ」とこれまでの自分について振り返る。

(3) 終結期（#7～#16）

①日常：一日にする家事を決め，実行する→父親に口やかましく言われても「自分で決めたことはやっとなる」と言い返せるようになる→自分でアルバイト先を探し，採用される。

②カウンセリング：「前は、するときはして休む時は休むパターンだった」とし、「今は物足りない部分もあるが無理していない」と話す。また、「(親の考え方)自分の考え方とはギャップがある。自分の考えは自分の考えだ」と話す。カウンセリングは、「外に出ていくときの準備をしているんだと思う」と意欲的。

2. 事例B (鶴田, 2001)

17歳, 男性。手のかからないよい子であったが, 中3の時に, 腹痛を訴え不登校に。原因は不明。その後, 頻発に自分の手を洗ったり, 自分の持ち物を「汚い」と拭く行動がはじまる。親の勧めで不本意ながら専門学校に入学。しかし腹痛を訴え2, 3日で不登校になり, その後自室に引きこもる。昼夜逆転。起きている時はテレビやファミコンをして過ごす。カウンセリングはカウンセラーが両親の電話相談を数回した後, 両親の希望と本人の了承の元, 訪問面接として開始する。全94セッション。終結事例。

(1) 導入期 (#1~#55)

①日常：該当する記述なし。

②カウンセリング：カウンセラーの訪問には「気にせずに家に来てよい」と答えるが, 最初クライアントはカウンセラーが来て30分後に居間におりる状況だった。それが次第にカウンセラーにお茶を出したり, 玄関まで送り迎えするようになる。カウンセリングでは, 感情を込めず, 現在の生活やこれまでの生活について淡々と話す。アルバイトが3日しか続かなかったことにふれ, 「俺はどうせ何をやってもだめなんだ」とこぼし, 「こんな生活してちゃ駄目だと思って, 朝4時などに起きてみるけど長続きしない」と自責する。また「こんな自分になったのは半分は自分の責任, 半分は親のしつけが悪かったから」と慥然とする。「人に中をみられたくないので」自室に鍵をかけ, カウンセラーにも「汚れているので覗かないで下さい」と言う。その後「台本を読んでいるように」過去から現在までの話をする。

(2) 展開期 (#56~#80)

①日常：ファミコンに熱中→両親から「両親に結婚や自分の出産について質問責めにする。母親にねぎらいの言葉をかけたり, 父親に忘れ物を駅まで届けるといった行動がある」との報告がある→母親と一緒に食事する→自動車免許を取得

②カウンセリング：将棋が得意なクライアントがカウンセラーに手ほどきする。リラックスして表情豊かになる。「親父やお袋は外向的で明るいのに, なんで俺だけ暗いのかとへこんでいたことに気がついた」と話す。夢の話をつくつかする。「1人になって他人との関係を持ち逃避しているのはわかるが, 解決方法がみつからない」「人は何を目的として生まれてくるのか」

(3) 終結期 (#81~#92)

①日常：大検の勉強を始める→アルバイトを始める

②カウンセリング：張りのある声で話すようになる。「獣医になりたい」夢を話し, そのために準備している生活ぶりを話す。そして, その中でこれまでの自分を「自分も含めた人の欲望に非常な嫌悪感を感じていた」と振り返り, 「よい人, よい就職, よい課程といった固定パターンは存在しないことに気がついた。自分が発見したり, つくりあげるものだと思うようになった」と自身の変化を語る。

3. 事例C (谷川, 1991)

17歳, 女性。4歳から幼稚園に入園するが登園不良。小学校は2年の2学期に転校した後不登校となる。5年の時再度転校し通えるようになる。中学1年の11月からほとんど行かなくなる。中学卒業後, ずっと家で過ごししており, 突然弟に対してかんしゃくのように叫んだり叩いたりする。全89セッション。継続事例。

(1) 導入期 (#1~#21)

①日常：#5には和裁の専門学校に行きはじめる。しかし先生から「早くしなさい」と言われ, 1カ月足らずで辞める。

②カウンセリング：「恥ずかしい」「自信がない」。弟2人の中に入っていけないことへの苛立ちや父親との関わり辛さについて話す。「見えにくい(肌があまりみえないような)服が欲しい」。

(2) 展開期 (#22~#71)

①日常：家族で野球を見に行く→ひとりで来談する→父親に病院に付き添ってもらったり, 部屋のヒューズや扇風機を直してもらって居間で過ごすことが多くなる。

②カウンセリング：父親, 犬, 周りの人に「見られている感じ」がすると訴え, 「人が自分を見て気持ち悪いと思うのではないかと懸念する。そして「なんで私だけこんな思いをしなくちゃいけないのか」と嘆く。製作したマスコットを持ってくる。

(3) 終結期 (#72~#89)

①日常：歯を治療する→同窓会に行く→教会の青年部に参加する→教会に行かなくなり, テレビばかりを見て過ごす→刺繍糸を買いに行く→ペースを落とした形で教会の参加を再開する

②カウンセリング：外出した話や両親と話したエピソードを通して嬉しかったことやストレス発散の方法等を話す。カウンセラーに成人式の写真を持ってくる。

4. 事例D (中西・辻河, 2000)

19歳, 女性。幼少時からおとなしく, 周りとなじめなかった。両親は厳しく育てる。小学校の時, 行き渋りがあり, 中1の10月に微熱を出して休んでから不登校に。

Table 1
ひきこもり4事例における理想自己志向性の分類結果とその特徴

	導入期			展開期			終結期			
	自己 基盤志向	社会的 価値志向	理想的 他者志向	自己 基盤志向	社会的 価値志向	理想的 他者志向	自己 基盤志向	社会的 価値志向	理想的 他者志向	
特徴	自己への実感が伴わない→自己嫌悪 自己を基盤にした見通しをたてられない	自己を圧倒するものとしての社会→回避 社会に対する苛立ち		自己の興味・関心への意識の高まり	社会に適応していない自己を自覚→惨めさ	(アルバイトといった他者との関わりがある時) 他者への羨望→自己嫌悪	自分の特性を活かしての将来の見通しを立てられる。 実際の行動が伴う	場を選択し、周囲との折り合いをはかりながら、適応をはかる。		
事例	A	「どんなことが合っているかわからない」	「(父親は自分を) 誉めようとせずぐちぐちいうので、また自分の部屋にひっこんでしまおう」	該当なし	「自分で決めた事だけやって、後はできればいいか」 「自己中でも素直なほうがいい」 「自立したい」	「人付き合いが苦手です…すぐに逃げ出していた…繰り返した」	該当なし	「自分のペースでやれてる感じがする」 「今はものたりない部分もあるが無理していない」	コンビニのアルバイトを始める。 嫌なことがあっても、すぐ逃げださないように、自分の意見を言うように工夫しはじめる。	該当なし
	B	「何がやりたいのかも思いつかなくなった」 「怒りや苦しみもなくなって家に埋もれた」	「人と関わりたくない」 「(自分の部屋について) 人に中をみられたくない」	該当なし	Th.に得意な将棋の手ほどきをする。 専門学校を退学することを自分で決断する。	「電車に乗っていると、まわりの人にみられているような気がする…惨め」	該当なし	「よい人、よい就職、良い家庭…固定パターンは存在しない…自分が発見したり、つくりあげるものだと思う」 「獣医になりたい…動物が好き」	「以前は学歴社会があるのは人の世だけだと思っていた…人の欲望に非常に嫌悪感を感じていていた」 「どうしたら高校卒の資格がとれるかとTh.に尋ねる。」	該当なし
	C	「(普通の女の子とは) 違う。幽霊みたい」	「犬が気になる」 「見えにくい(肌があまり出ない) ような新しい服がほしい」	該当なし	「私は縫うことが好きなんだなあ」	「私が騒ぐこと、隣近所の人はどう思っているのかなと思った」 「外に出ると人が自分を見て気持ち悪いと思うのではないかなと思う」	該当なし	「刺繍糸を買った」	「教会で人が集まった時、前に出て蠟燭を渡す役ができた」 「(教会の手伝いは) 一日おき」 「新しい服を買った」	該当なし
	D	「自分の考えを押さえつけられているような感じ」 「(相談室でしたいことは) そんなにない」	「自分の考えでしていることに対して、何か言われると腹が立つ」	該当なし	「水泳を習いたい」 「習い事をしたい」 家では母親に、「友達が欲しい」 「彼氏がほしい」と話す。	「このままだと、この先居づらくなる。喋りたくはないが、しゃべらんと」	「(同世代の同僚は) 言い方がうまい。(自分) はためまくる性格、嫌いや」	「今まで興味のあること、思ってもやれなかった。これからは行動に移したい」 「一人で行くと自分が頼り…達成感がある」	「自分に合いそうな学校を探す。」	該当なし

中2では適応指導教室，中3では保健室登校。卒業後3年は週1,2回，家庭教師の元に通い，年に1,2回適応指導教室にも顔を出し，その他は家で過ごす。全寮制の学園に入学し半年通うも居場所がなく不登校に。学園でのカウンセリングは隔週で通い，自動車免許も取得する。学園卒業を機にカウンセリングの引き継ぎとなり，来談。全19セッション。終結事例。

(1) 導入期 (#1~#8)

①日常：天ぷら揚げのアルバイトを始める

②カウンセリング：「(来談について)何も考えずに来た」「(相談したいことは)そんなにない」，「(相談室に)すぐく期待することはない」と言う。カウンセリングで自発的に話すことはなく，話題を提供すると抑揚のある口調で話す。話題は完全に家にひきこもっていた時の話しやバイトを選んだ経緯について。

(2) 展開期 (#9~#15)

①日常：体調を崩し数日アルバイトを休む→歯の治療に行く→アルバイト先の上司に反抗する→友達5人と一泊旅行に行く

②カウンセリング：「水泳がしたい」「体を鍛えたい」と様々な願望を述べ，「自分の考えでいろんなことをやっている」と自己評価する。職場の人たちは自分より元気で「張り合いがある感じ」がし，アルバイト先で孤独を感じる話。そしてそれは以前学校で感じていた孤独と通じていることに気づき「めっちゃ寂しくなった」。そして「普通に過ごしてきた人たちには抵抗を感じ」，「私は黙っていることが多い」ので，職場でなかなか自分をわかってもらえないのだと振り返る。アルバイトでも学校でも，何か言われて腹がたっても，我慢しており，「ためてためてためまくる性格，嫌いや」と話す。そして同世代の同僚が「うまくやっている」「言い方がうまい」と自分と対比させて話す。

(3) 終結期 (#16~#19)

①日常：バイトの仲間と遊びに行く→高校進学を決め，そのための準備(学校探し，勉強等)をする

②カウンセリング：バイトの仲間自分の考えを変えたほうが良いと言われ「そうやな」と受け入れたり，腹をたてていた仲間の気配りに気付いた話をする。自分に合った進路について考える。

以上の4事例における理想自己志向性の分類結果とその特徴をTable 1に示す。

IV 考 察

以下，面接のプロセスに沿って非精神病性ひきこもりの特徴とカウンセリングにおける変化について考察する。なお，文末の括弧内のアルファベットは，それが事例A, B, C, Dの中のいずれかを示す。

1 非精神病性ひきこもりの理想自己志向性の特徴

まず，非精神病性ひきこもりの理想自己志向性の特徴を導入期のクライアントの様子を中心に検討する。

(1) 理想自己の持てなさと自己嫌悪

導入期でクライアントは，「何がやりたいのかもわからなくなった(B)」と，自分の欲することや感情がわからないと訴える。どうしたいのかが自分でも分からなくなっていて，でも今のままでは「幽霊みたい(C)」だと感じるクライアントは自己を「汚く(B)」「情けない(C)」ものと嫌悪する。このことから，ひきこもりの青年の特徴のひとつに，この現実自己への実感の伴わなさ，そしてそのために現実自己を基盤とした目標をたてられない状況があると思われる。理想自己志向性でいうと，自己基盤志向が低いということになるが，クライアントの自己嫌悪の高さを考えると，これは積極的に志向しないのではなく，志向できないとみるのが適切であろう。

(2) 社会的価値への怒りと回避

また，社会には今の自分をみせられない(C)もしくはみられたくない(B)ものであり，社会からの関わりには「腹のたつ(D)」と，自分らしさの発揮を疎外するものとして認識されいらだちを示す。ひきこもりのクライアントにとって外界は，武田(1997)の指摘するように「自分と対峙し圧倒するもの」であり，「それに支配されずに自分を守るには，関わり合いを断つしか」ないのだろう。また，現実自己の自覚しにくさや，それを基盤とした理想の形成できなさは，牛島ら(1997)が指摘するようにそれだけ彼等の自己像が「外的現実直面したとき脆くも崩壊してしまう」ものであることを示しているのかもしれない。

(3) 社会適応する者としての他者

なお，理想的他者志向にあたる発言の記述はほとんどみられなかった。記述になくとも実際のカウンセリングでは発言された可能性はあるだろう。しかしながら，記述の少なさから，実際にもそうした発言は少ないのではないかと推察される。これはクライアントの社会生活の場が限られており，社会全般から回避しているクライアントに，他者のひとりひとりの特性を知る程の関わりがもてない状況も関係しているのではないだろうか。限られた人間関係の中で垣間見る，他者にあって自分にはない特性は，“社会適応に必要で自分にはない特性”と同質のものとして認知され，自己と対峙する社会のあり方として社会的価値志向同様，目を向けたくないもの，即ち回避するものと捉えるのではないだろうか。

2. カウンセリングによる理想自己志向性の変化

次に，非精神病性ひきこもりの理想自己志向性がカウンセリングを通してどのように変化するか検討する。カ

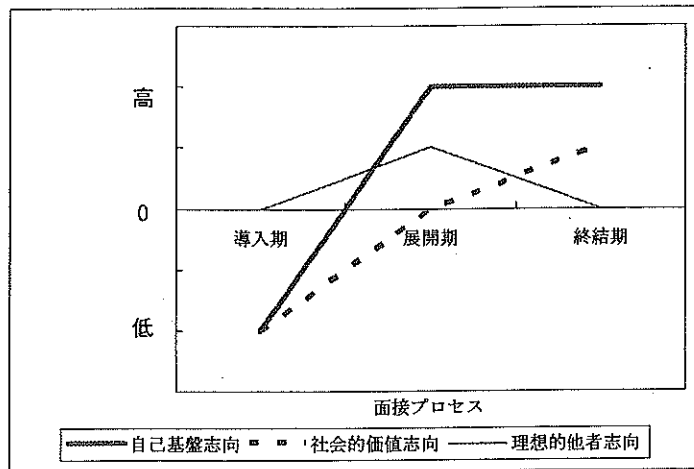


Fig.1 理想自己志向性のカウンセリングプロセスによる変化モデル

カウンセリングにおける理想自己志向性の変化をグラフ化したモデルを Fig.1 に示す。

(1) 自己基盤志向の高まり

展開期に入ると、4事例中3事例のクライアントが、将棋 (B)、マスコット作り (C)、水泳 (D) と、自分の興味関心について発言したり、カウンセリング場面へ持ち込んでいる。これはクライアントが自己の特性に意識を向けはじめ、カウンセリングに対しても自発性を発揮していると読み取れる。面接開始時には自己の欲求や感情にさえも現実性を持てなかったクライアントが、カウンセリングを通して自己の特性に気づき、それを発揮しようとするこの変化は、理想自己志向性の視点から言えば自己基盤志向が高まるプロセスと言い換えられるだろう。そしてカウンセリング場面でのクライアントの態度をみると、この自己基盤志向の高まりは自分らしさを発揮する喜びとしてクライアントに認識されるようである。なお事例 A では、クライアントが自分のペースで一日の家事を計画し実行するところが、この自己基盤志向の高まりに該当すると思われる。

(2) 社会的価値志向の変化

また、自己基盤志向の高まりと並行して「人づきあいが苦手で (A)」「隣近所の人はどうみてるのかな (C)」と社会や周囲の人々と適応していないことへの不安や懸念が言語化される。社会を嫌悪し回避していた導入期に比べて、社会に適応できない自分を受け止め始め、社会的価値志向も高まるようである。

これはクライアントが自分の興味関心を表現する中で、自分の欲求や特性を感じたり認識することができるようになり、それに伴い社会に対する不適応感も顕在化するのではないかと考えられる。

終結期になると、アルバイト (A) やボランティア

(C)、そして学校探し (B,D) と、クライアントの社会生活の場は実際に広がりを見せる。新しい社会に適応するために、クライアントは「すぐ逃げ出さない (A)」「一日おき (C)」と自分の傾向を踏まえながら具体的対策を検討している。社会について「固定パターンは存在しない…自分で発見したり、作りあげていくものだと思う (B)」の発言に代表されるように、クライアントは自己の世界と外界の2つの世界の折り合いをつける術を試行錯誤する過程そのものに主体感を持ち、意義を見出しているようである。このように、自己と対峙するものから不安の対象へと移行していた社会は、終結期において、クライアント自身が活動の場を選択できる、より柔軟なものへと変化するようだ。

(3) 理想的他者志向の機能

なお、カウンセリング開始時からアルバイトを始めている事例 D では、展開期で自分にはない特性を持つ他者に対する劣等感やそれを取り入れたいとする理想的他者志向の高まりが伺われる。これは自己表現を通して、より自己に現実感を持つことで、周囲に対しても、世の中全般からより具体的に個々を見る視点が生まれるのではないかと考えられる。また、この理想的他者志向の高まりは、「嫌いや」「へこんでいたのに気づいた」と、より具体的で部分的な自己の部分的特性に対する自己嫌悪につながるようである。このことから、理想的他者志向の高まりは、それまでの自己全般に対する否定的感情をより具体化され、部分的なものへと焦点化する機能を持つと考えられる。

V 今後の課題

今回、Fig.1 に表した理想自己志向性の変化は、どの

部分が非精神病性ひきこもり特有なもので、どの部分が全ての事例に通じるものなのか現段階では断定できない。今後、他の事例での検討を重ねることで、このプロセスの共通項や症状による特性を具体化することができるであろう。

また、本研究では異なる理論的背景を持つカウンセラーによるケースを対象としており、そのカウンセラーの関わりについては言及することができなかつた。よってクライアントの理想自己志向性の変化とカウンセラーの関わりがどのように関係するのかは触れていない。カウンセリングはクライアントとカウンセラーの両者によって作られるものであることからしても、クライアント側だけの検討に留まるのは不十分であろう。今後自験例を対象にしてカウンセラー側の関わりについても合わせて検討することが必要であると思われる。

<付記>

本研究を作成するにあたり、ご指導下さった九州大学大学院人間環境学研究院教授 野島一彦先生、同研究院助教授 高橋靖恵先生に深謝いたします。

文 献

- 近藤直司 (1997) 非精神病性ひきこもりの現在. 臨床精神医学, 26(9), 1159-1167.
- 溝上慎一 (2001) 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理—. ナカニシヤ出版.
- 水間玲子 (1998) 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について. 教育心理学研究, 46(2), 131-141.
- 中西美奈・辻河昌登 (2000) 不登校, 閉じ籠もりを経て, 社会参加を始めた女子青年との面接過程. 心理臨床事例研究兵庫教育大学心理臨床研究会紀要, 3, 33-41.
- Rogers, Carl R. (1954) *Psychotherapy and Personality Change*. Chicago: University of Chicago Press.
- 齊藤 環 (1998) 社会的ひきこもり—終わらない思春期. PHP 研究所.
- 桜井利行 (2002) 社会的ひきこもり経験者の語り. 日本心理臨床学会第21回大会発表論文集.
- 高橋紀子 (2002) 大学生における理想自己の志向性と学生生活 QOI の関連について. 日本人間性心理学会第21回大会発表論文集.
- 武田直己 (1997) 引きこもりから自己の発見へ—劇的な回復を呈した症例の4年間の精神療法過程—. 精神分析研究, 41(4), 69-71.
- 谷川由美 (1991) 引きこもりを続けていたA子の事例. 九州大学心理臨床研究, 10, 45-54.
- 鶴田一郎 (2001) 間主観カウンセリングにおける「変革体験」と「生きがい」についての一考察—「引きこもり」の青年期男性クライアントへの訪問相談を通じて考えたこと—. カウンセリング研究, 34(2), 203-213.
- 富田富士也 (1996) 引きこもりと登校・就職拒否, いじめ Q&A. ハート出版.
- 牛島定信・佐藤譲二 (1997) 非精神病性ひきこもりの精神力動. 臨床精神医学, 26(9), 1151-1156.
- 山本眞利子 (2001) 長期閉じこもり青年への発達心理療法に基づくカウンセリング過程モデルの実践的適用. カウンセリング研究, 34(2), 180-191.